

佳作

はがき

新垣 絹代

まぶしく照りつける太陽も幾分か柔らかさを増してきて、いつしか朝夕の風に秋の気配を感じ始めるようになった九月、良子叔母さんの次女の結婚式があり、私は披露宴会場で久しぶりに父と横に並んで座った。父は、六十八歳になった今でも一人で細々と写真館を経営している。しかし自宅で写真をプリントアウトできる時代になり、写真館営業にも陰りが出始めている。

私は一人息子の小橋川薫。学芸員として県の教育委員会に勤め、職場から歩いて十五分ほどのアパートに一人で住んでいる。四十歳に手が届こうとしている。

父とはずっと距離を置いていたので年に二、三回顔を合わせばいい方だった。

「どうだ、ちゃんと仕事はやっているか？」

父は、うれしそうに聞いてきた。

「ああ、結構幅広い業務があつて、学芸員の仕事にだけかかりつきりというのはいけないけどね。でもなかなか楽しいよ」

「そりゃあ良かった。もう勤めて何年になる？」

「十年だよ」

「十年か、早いもんだな。これからが踏ん張り時だな」

その時、親戚の人が声をかけた。

「薫、お父さんとそっくりになったな」

「そんなに似てる？ いやだなあ」

私は父に見られないように、顔をしかめて見せた。

「薫、結婚はまだか？」

「またも訊いてきたので、口元に笑みを浮かべ頭を横に振った。そのうち、誰も何も言わなくなるだろうな。もつとも父の妹の良子叔母さんだけは薫もいい年だから、真剣に結婚考えないとね。いい子がいるけど、今度会って見ない？」

と、心底心配してくれる。

黙ってビールを飲んでる父の、随分やつれた横顔を見ながら、

「ご飯は食べているの？ 酒ばかり飲んだら体に良くないよ」

「ああ、大丈夫だよ」

またビールを口にする。

それから一ヶ月も経たないうちに父に胃がんが見つかった。たまたま体調がすぐれず勧められるまま受診した人間ドックで発覚し、すぐに摘出手術を受けた。三か月入院したが、ますます細くなった。

その頃、私の課に非常勤で若い女性が配属された。早坂愛子。二十一歳で小柄だが声が大きく、口を開けてよく笑う。ショートカットの髪が良く似合っていた。なによりも明るい笑顔に惹きつけられた。中年になった私はもちろん相手にされるわけはなく、遠目にいい子だなあと見つめていた。

毎週金曜日の夕方はバドミントンで汗を流す。職場内で愛好会を結成し五年が経つ。仕事を終えた後、近くの小学校の体育館で二時間ほど汗

を流し、その後居酒屋へと流れるのがお決まりだった。部署を超えた気心のあう仲間とのひと時は楽しく、私はできるだけ参加するようにしていた。

ある日、メンバーの一人が早坂愛子を誘ってきた。バドミントンは下手くそで、何度も空振りを繰り返している。そんな中でも何が楽しいのか大声で笑う。が、二次会での酒はめっぽう強かった。ひまわりの花が似合いそうな愛子はすでに皆から「愛ちゃん」と呼ばれ、可愛がられていた。一人で帰れるから大丈夫とふらついて歩く彼女を家まで送った。

愛子は、東京出身なので垢抜けていて、何でまた沖縄に来たのと誰からも必ず聞かれていた。明るい笑顔の合間に、時どき見せる愁いを帯びた表情が艶めいていて、男性なら声をかけずにいられない雰囲気があった。実際、よくもてた。

背が高く、ハンサムな非常勤の若い子は、誰から見ても解るぐらい、愛子に夢中だった。若さと情熱は、時として微笑ましく、盲目だった。就業を終え、廊下や玄関で愛子を追う姿が見られたが、その恋は成就しなかった。

ある日、私は同僚の上原に誘われて一緒に酒を飲んだ。行動的で仕事のできる後輩は、野暮つたい外観だが、情がありがたい奴だ。

「先輩、早坂愛子をどう思います？」

「どうって、明るくて可愛いし、良い子だよな」

「実はね、彼女をドライブに誘ったんですよ。断られるかなと思ったけど、意外にあっさり『いいですよ』と、いつてくれてね。沖縄の海は大好きと言うので、先週の土曜日二人で辺戸岬までドライブに行きましたよ」
グラスを傾けながら、黙って聞いていた。

「話しが弾んで、とても楽しくてね。いい雰囲気、帰る頃はもうすっかり暗くなり、つい出来心でキスをしようと迫ったんですよ。そしたら思い切り反撃にありました。ぼくに気がありそうな素振りだったのに、まったく女って解らないものです」

上原の無責任な言い方に少々腹が立ったが、それよりも無防備な彼女の行動は、私を息苦しくさせた。

そんなある日、バドミントンを終え、二次会の居酒屋を早めに引き上げようと席を立つと、愛子も帰ると席を立った。自然の成り行きで、連れ立って歩いて帰った。

「沖縄にはもう慣れた？」

「はい、とても住みやすいです」

「食事は口に合う？」

「何でもおいしいです。ゴーヤーチャンプルも大好きです」

「ふーん、ゴーヤーが好きなら、大体の物は大丈夫だよ」

「はい、でもナーベラーっていうんですか、ヘチマだけはさすがに食べられないです。どうも、垢すりのイメージがあつて」

ほんのりと酔った赤い顔が、外灯の光で初々しく映った。

「この前、ヒージャー（やぎ）汁を食べに連れて行ってもらったんです。匂いがきついぞつて言われたけど、なかなかいけました」

ヒージャー汁が苦手な私は、思わず苦笑いをしてしまった。

「皆さんいい方達ばかりで、色々教えてもらってます」

「そう、いくら沖繩の人はいい人が多いって言っても、下心のある人もいるんだから気をつけないとね」

「それってどういう意味ですか？」

「もっと自分を大事にしなさいっていう事」

しばらく間があり、

「小橋川さんって、いつも冷静で物静かなんですね」

愛子は話を変えた。

「わたしが四歳の時、両親が離婚したんです。母はわたしと妹の二人を引き取り、女手一つで育ててくれました。とても大変だったと思います。母の苦勞が分かるだけに、三つ下の妹の面倒を見て、お姉ちゃんだからしっかりしなさいって言われつづけても頑張ってきたのです。でも、わたしさすがに息切れがして嫌になっちゃったんです。だから高校を卒業すると、誰にも干渉されないようにわざと遠い沖縄に来たんです」

「お母さんは反対しなかったの？」

「もちろん反対しましたよ。今までずっといい子で通してきたけど、わた

し初めてお母さんに反抗したんです。いい加減わたしを自由にして、家を出て一人でやっていきたいと泣いて訴えたの。お母さんも妹もだいぶシヨックを受けたみたいだけど、わたしの決心が変わらないのを知ると、あきらめたみたい」

「びつくりしただろうね・・・」

「はい、でも愛子には今まで家の犠牲にしてしまっただけで申し訳なかったと言ってもらって、心が晴れました」

「偉いね、一人で未知の島に住みつくとは」

「いいえ、前から憧れていたんです、沖縄に。青い海に青い空、本当にきれいですね」

愛子の瞳がキラキラと輝き、沖縄の自然が似合う子だなと思った。

「それに、わたし父親を知らないから、男の人に親切にされるとつい甘え

「ちゃうんです。気をつけます。」

嫌味のない素直さだった。私の胸が、さざ波を立てて波打った瞬間だった。その日から、私と彼女の仲は急速に縮まった。

私たちは、暇さえあれば話してばかりいた。育った場所も環境も違う二人は、お互いを理解したい一心で、胸の内をさらけ出した。ある日、私は初めて自分の生い立ちを告白した。

物心ついた時から私に母はいなかった。父と二人きりだった。厳格で物静かな父は、写真館を営んでいた。母は病気で死んだ、と聞かされていたが、淡い靄のような記憶がある。何が原因なのかは覚えてないが、泣いて駆け寄ったその人の胸は温かくて柔らかかった。

「どうしたの？薫ちゃん」

その声は、寒い冬の湯たんぽのような温かさで私を包み込む。

父は寡黙な人だった。面長でこけた頬、きつねのような細い目に黒縁のメガネ。やせて背は低い、いつもスーツを着て気取って歩いていた。隣近所の人に自分からは挨拶はしないし、人を寄せ付けない雰囲気か漂っていた。写真館は自宅から歩いて十五分ほどの繁華街の一角にあり、結構繁盛していた。若い従業員を二人雇い、朝十時から夜八時まで営業していたが、父は朝出勤すると暗くなるまで帰ってこなかった。日曜日が定休日なので、土曜日の夜は決まって飲みに行き、夜も更けてから帰ってくるのが常だった。私はいつも一人ぼっちだった。

アパートは六畳の和室が二つに食堂テーブルが置かれたダイニングキッチンで、和室の一つを私の部屋にしていた。朝はまだ寢床にいる父を起こさないようにそっと起き、食事はほとんど買って済ましていた。

父はあまり私に構わない代わりにお金には不自由させなかった。

アパートを出て近くの山田商店まではほんの五十メートル足らずの本道だった。私は毎朝その商店に行き、菓子パンや牛乳を買って家で食べた。近所の人たちは皆私に親切だったし、気安く声をかけてくれた。お父さんにそっくりだね、とよく言われた。

山田商店に向かう途中に金城と表札のかかった一軒家があり、まるで無防備でいつも玄関が開けっ放しだった。その家からは小太りしたおばさんの大きな声が時おり聞こえ、三人の子供のかん高い声が響き渡っていた。

「あーっ、かおるだ！」

三歳の洋子は、いつも私を見かけると大声でそう叫ぶ。おばさんに似て声は大きいし、人なつっこく駆け寄ってくる。すると兄二人も飛び出

してきて、

「かおる、遊ぼうぜ」

と声をかけてくる。透は私より二つ上でやさしく頼りになる。哲は私より一つ下で無鉄砲でひょうきんだ。生意気な上、私より背が高い。おばさんは透や哲にいつも怒鳴っていたが、私にはやさしく接してくれた。時どきご飯に呼ばれたり、一緒に遊んでおやつをごちそうになったりした。

ある年の十二月の暮れ、金城一家総出で年末の大掃除をしているところに通りかかって呼び止められ、一緒に掃除を手伝った。会社勤めのおじさんは窓ガラスをホースで流していた。その側で洋子は手伝っているつもりだろうがホースの水を辺りにまき散らし、大きな口を開けて笑っている。私は透、哲と一緒に雑巾で家中の畳や床を拭いた。時どきふざ

けて雑巾を投げ合ったりすると、おばさんの怒鳴り声が落ちてくる。その度に男三人は首をすくめて笑った。掃除がひと段落つくつと

「さあ、おやつにしようか。薫ちゃんが手伝ってくれて助かったわ。ありがとうね」

そう言つて、おばさんはジュースとカステラを出してくれた。皆で笑いながら頬張ったカステラはとてもおいしかった。自分の家にはない明るさ、家族の団欒がそこにはあつた。兄弟がいて羨ましいと思つた。

小学校入学を控え、空をベールで覆うようなかすみ雲が薄く広がつていた。三月とはいえ寒さも和らぎ、昼間は半袖でも過ごせるような日々が続いていた。日曜日の昼前、名護市に住んでいる良子叔母さんが、手作りのちらし寿司を携え訪ねてきた。父と似た一重の切れ長の目だが、その瞳はやさしく澄んでおり、ウエーブのついた髪はきれいにまとめら

れている。いつも何かと私を気にかけてくれるが、遠く離れた所に住んでいるため、たまにしか会えない。

「薰ちゃん、もうすぐ一年生ね。ランドセル買ってきたけど、どうかしら」
「わあ、良子おばさんありがとう」

大きな箱を開けると、真新しい黒のランドセルが出てきた。皮の臭いが鼻を突いた。せかされて肩に担ぐが、その重さに後ろにひっくり返りそうになり手をばたつかせていると

「まるで、カマキリだな。ハッハッハ」

起きてきたばかりの父が声を出して笑い、つられて良子おばさんも笑った。

「ほんと、やせっぽちのカマキリね」

やさしい笑顔を浮かべていたが、急に父に目を移すと、

「兄さん、薫ちゃんにちゃんと食事作ってあげてるの」

「できるわけないだろう。ここ最近卒業式やら証明用写真を撮るお客さんがいっぱいいて、昼飯も食べられないほど忙しいんだよ」

「そんな事言ったらって、父親でしょう。薫ちゃん、標準より小さいじゃない。もっと栄養をつけてあげないと」

「分かっているよ」

「やっぱり、奥さんがいないとだめね、男は・・・」

二人のやりとりを聞きながら、背の高い自分を想像してちらし寿司を口いっぱいほおばった。

良子叔母さんが帰った後は、また元の暗く静かな船底のような家に戻った。父は黙って新聞を読み、私は部屋で動物図鑑のページをめくる。静寂の中でページをめくる音と新聞をめくる音だけが響く。そんな空間も

私にとっては唯一の居場所だ。会話はなくても父が居てくれる。小さな平穩にすぎりつく、か弱い子猫のような私であった。

小学校は平凡に過ごした。クラスで一番背が低いので、朝礼ではいつも先頭に並んだ。教室でも席は一番前だったが、何をするにも皆より遅かった。自分に自信がなく、内気でおとなしく、いつも皆のあとをついて歩いていた。いじめっ子はいたが、私の存在すら知らないかのようにだった。ただ本を読むのは好きだった。父は本であれば何でも買ってくれたし、本棚がすこしずつ埋まっていくのが楽しみだった。

朝から蝉の音がうるさく響き、それでもそよ風にまだ心地良さを感じる早朝だった。山田商店で菓子パンと牛乳を買い、家に向かっていた。

「あーっ、かおるだ！」

と言う洋子の声が響いた。その声に振り向くと、おばさんが庭に立つ

ていて私を手招きした。

「薰ちゃん、床下に猫が死んでいて取りたいんだけど、中に入れないかなあ。透と哲では大きくて入れないの」

いつも威勢のいい兄弟はそっぽを向いてこぜりあっている。

「ごめんね。こんなお願いして・・・」

標準以下の小ささは私のコンプレックスになっていたが、お婆さんの頼みとならば、私はパンと牛乳の入ったポリ袋を縁側に置き、四つん這いになって床下に潜った。顔にかかる蜘蛛の糸を手で払いのけながら前に進んだ。二メートル入ったところにその死骸は転がっていた。悪臭がする。右手に持った新聞紙でそれをつかむと後ずさりして床下から出た。とたんに

「わーっ、かおるすごい！」

という洋子の声が頭上からキラキラと降り注いできた。ちよつと得意気な気持ちになり、照れも交じって軽く笑った。おばさんが新聞紙にくるんだ猫の死骸を持って裏手に回ると、透や哲は

「くさい、くさい」

と鼻をつまみながら、ついていった。

洋子たちきょうだいは、時どき私の家に遊びに来た。透と私は気が合い、一緒におもちやで遊んだり、ふざけあつたりした。哲は少々乱暴なところがあり、家の中の物を壊されないかと気が気ではなかった。それでも殺風景なわが家が一瞬にしてバラ園のように明るく賑やかになるのがうれしくて、私はまだ字が読めない洋子に本を読んであげたりした。

「かおるって、こんなにいっぱい本をもっていていいなあ。もつとよんで」と、洋子はますます私にくつついて離れなかった。

そんなある日、ささいな事で哲とけんかになった。突然、哲が

「お前の母ちゃん、男と出て行ったんだってな」

口をとがらせて発した言葉に、私は耳を疑った。

「何言っている。母ちゃんは病気で死んだんだよ」

「俺の母ちゃんが、隣のおばさんじゃべっているのを聞いたよ。お前の母ちゃんお前を置いて若い男と出て行ったって」

いきなり透が

「何言ってるんだよ、バカ」

と、哲の頭を叩いた。

そんなの嘘だ。母ちゃんは死んだのだ、生きているはずがない。一枚の葉っぱが渦を巻いて沈んでいくように、気持ちぐるぐる回っていた。

その夜疲れて遅く帰って来た父の顔を見ると口から出かけた言葉がす

ぼんでしまう。お茶漬けを流し込み、テレビの前で泡盛を口にする父におやすみを言い、莫塵の上に寝っ転がった。あれこれ考え、なかなか寝付かれなかった。

いつだったか、アパートの隣りのおばさんが

「お母さんは会いに来るの」

と、聞いてきた事があった。返事の代わりに首を横に振った。

近所のおばさん達が立ち話をしていて、通りがかった私に

「お母さんから手紙とか来るの？」

と、聞いてきた事もあった。何でそんな事を聞くのだろうかと思議に思ったが、その時も首を振って通り過ぎた。

やっぱりお母さんは生きているのだろうか。だとしたら、何処にいるのだろうか、なぜ家に帰ってこないのだろうか、分らないことだらけだった。

父に聞きたかったが、なぜか躊躇っている自分がいた。

夏休みに入ると、父はよく私を写真館に連れて行ってくれた。入口から入ると、正面に受付カウンターがある。後ろの壁には額縁に入った写真が整然と飾られているが、その中でも一番隅に忘れ去られたように飾られている清楚な女性の写真が気になった。おしゃれなワンピースに、パーマのきいた黒髪がきれいにウェーブして肩までかかっていた。黒い瞳に見つめられると引き寄せられるようだった。いつの間にか

(この人が母さんかも知れない)

何の根拠もなく、漫然とそう思っていた。いや、そう思うことによって自分を慰めていたのかもしれない。

小学三年生になった。何をしなくても背中から汗がすーっと流れていく暑い八月、いかげん学校に行きたいと思いつつも、一向に進まな

いカレンダーを眺めては、長い夏休みにため息をついていた。一人部屋に転がってプラモデルのおもちゃで遊んでいた。

「ごめん下さい」

と言う声がし、私は玄関のドアを開けた。一人の女性が立っていた。白いブラウスにきらきら光るネックレスが目の前で輝いていた。赤い口紅がまず目に入り、猫のような大きな丸い目が私をじっと捕らえていた。写真館に飾られている女性に似ていると思ったその時、

「薰？薰よね、大きくなったね」

腰を落とした女性の紺のスカートが翻ったかと思うと、私の体を抱きしめた。この人は誰？私は訳が分からなかった。やがて、女性はおもむろに体を離すと、

「もう何年生になった？」

と聞いてきたが、私は返事ができなかつた。

「たしか三年生よね」

私は軽くうなずいた。

「ほんと、こんなに大きくなって・・・」

そう言うのと、手で目頭を押さえた。そして、持ってきた大きなデパートの袋を開けた。

「シャツやズボンが入っているからね。ちよつと大きいかもしれないけど、薰に思つて買つてきたのよ。」

それから私の頭に手を置いて

「薰、ごめんね。薰を置いて出て行って、母さん許してね」

電流が走つた。その女性はその後もいろいろしゃべっていたが、覚えていない。ただ、

「父さんには内緒にしてね」

という言葉は聞こえた。そして、哲が言った、

（お前の母ちゃん、男と出て行ったんだってな）

という言葉と交差して、私は声を失っていた。どれくらい経っただろうか、ベランダの植木鉢から蝉のジイジイという声が一瞬間聞こえた。気がつくとも闇と静寂が広がっていた。

流し台の横から一匹の蜘蛛が出てきた。尻からしおり糸を出しながら歩いている。時どき足場から落下するが、糸を伝ってまた元に戻る。蜘蛛は網を張りハエ、蚊、ゴキブリなどを捕獲するから殺してはいけないと父に言われていた。いつしか見入っていた。

めずらしく仕事から早く帰って来た父が玄関に入ると、私はデパートの袋を差し出した。

「母さんっていう人が、持ってきた。ぼくにとって……母さん生きていたの？」

一瞬顔を曇らせた父は私を睨んだが、何事もなかったかのように側をすり抜け、台所のテーブルに腰かけた。私は父を見つめ、父の言葉を待って両足を踏ん張ってかろうじて立っていた。随分長い間そうしていた。やがて、父は静かな口調で言った。

「母さんが来たのか。薫にはいつかきちんと話さなければと思っていた。実はね、母さんは写真館の若い従業員と出て行ってしまったんだよ。お前が三歳の時だった」

「母さんはもう帰ってこないの」

「ああ、大阪でその人と暮らしているらしい。むこうで、子どももいるぞうだ」

なぜか悲しくなってきた。

「ぼく、いきなり母さんって人が来て、訳が分からなかった。母さんは病気で死んだって言ったじゃないか。何で嘘なんかついたんだよ！なんで本当のこと言ってくれなかったんだよ！」

頬に涙が伝って落ちた。父は言葉を探していた。やがて、ため息をつくと

「ごめん、父さんも辛かったんだよ。」

父の言葉に涙が止まらなくなっていた。

「何で言ってくれなかったんだよ！」

私はさらに声を上げて泣いた。

「薫、泣くな！男だろう。父さんも辛いけど我慢しているんだ」

「父さんはいつもそうやって我慢しろとしか言わない。本当のことは言わないし、嘘つきだ。もう父さんなんかいやだ！嫌いだ！」

私は部屋に入ると、襖を思い切りピシヤツと音を立てて閉めた。母が生きていたという現実に戸惑いながら、母を受け入れることができなかった。時どき一人で酒を飲んでいる父の寂しそうな後ろ姿が目には浮かんた。父の気持ちを考えると胸が苦しかった。でも、私は気持ちを父にぶつける事では自分の怒りを抑えることができなかった。頬を伝う涙の感触を、ただ静かに味わっていた。

一夜にして糸を張り巡らす蜘蛛が好きだった。人知れず、目立たないように存在しながらも、均一に統制された幾何学的な模様を作り上げる。その静かな生命力に目を奪われる。普段は気の弱い日陰的存在だが、捕食時には激しく格闘する。そんな単独行動が気に入っていた。私は蜘蛛になった。先が見えない砂漠の中を歩き回っている、父もいない、母もいない孤独な蜘蛛だった。どこにいても目立たないように心掛けた。そ

して、回りの人に対して心を閉ざしていった。

中学生になっても相変わらず背は低かった。友達もできなかった。食事は相変わらず買って済ましていたが、なるべく近所の人に会わないようわざわざ山田商店とは反対方向にある別の商店を利用した。金城家の前も避けた。部活にも入らず図書館を利用して本だけを読んでいた。本の中だけがすべての世界だった。

父とは、ほとんど会話もなくなっていた。母に捨てられ、父にも構われず、私は生きる価値のない人間だ。ずっと自分の感情を抑え、ひっそりと生きてきた。

そんな孤独の中で、万引きを覚えた。盗むものは消しゴム、サインペン、チューインガムとどれも小さいもので、まるで私の小ささを現しているかのようなだった。

ある日、文具店で周囲に気をつけながらサインペンを制服のポケットに滑り込ませ、店を出た。振り向くと、一人の男が後をついてくるのが見えた。次の角を曲がり後ろを振り向くと、その男も角を曲がってきた。心臓が鼓動を打ち始めた。万引きを見られたのかも知らない。どうしよう。いやまさか……でもずっと後をついてくる。ポケットに入れた手が汗ばみ、鼓動は早くなる。だんだん男との距離が縮まってくる。肩を掴まれて振り向いた時、その顔は洋子になった。目が覚めた。夢だった。洋子にだけはいつもの「すごいかおる」でいたかった。額に浮かんだ汗を手で拭くと、心底反省した。もう二度と万引きはするまいと心に誓った。

大学は、わざわざ遠い大学を選び、寮に入った。父と離れたかった。父には入学費と前期の授業料だけ出してもらい、家庭教師のアルバイトをしながら生活費やその後の授業料を捻出した。

世界の歴史や遺跡物の本が好きで読み漁ったあげく、考古学を専攻した。過去に遡るほど、昔の人が残した物や生活の跡から歴史を探る事に胸が躍った。そんな中で、ようやく心を開いて話のできる友人にも出会えた。大学の自由な気風と寮生活の気ままさで、ようやく一人前になれた気がした。

ちょうど後期の試験の時だった。「歴史考古学」の学生は二十人余りで、小さな教室なので、一人用テーブル付き腰かけに掛けて試験を受けていた。教官は厳しく見回るわけでもなく、黒板前に椅子を置き足を組んでくつろいで本を読んでいた。一番後ろに腰かけていた私は、今がチャンスと腿の上に教科書を広げた。必死になってペンを走らせていると、ふいに黒い靴が私の前で止まったのが見えた。しまったと思ったが、顔を上げることもできず、私は固まっていた。長い時間に思えた。黒い靴が

踵を返し、前に歩いて行った時、ようやく私は息をした。そつと教科書を閉じると、これで単位を落としてしまったと、後悔の念でいっぱいになった。恥ずかしくて、教官の顔をまともに見る事ができなかった。逃れるように教室を後にしたが、その夜は悶々として寝れなかった。翌日、私は迷わず教官室のドアをたたいた。

「小橋川薫です。昨日の試験で、カンニングをしました。申し訳ありません」
教官は黙って私を見つめたが、何も言わなかった。

「反省しています。すみませんでした」

それしか言えなかった。教官は、黙ってうなずいた。深く一礼して、ドアを後にした。次に頑張ればいいやと自分自身に言い聞かせ、謝ったことで重かった気持ちが少し軽くなった。そのことを友人に話すと、

「お前、要領悪いな。堂々と教科書広げるなんて、カンニングしたことな

いのか」

と笑われた。

「おそろく、単位落とされるだろうな。でも、ちゃんと謝って良かったんじゃない」

神妙な面持ちで言ってくれた。しかし、単位は落とされなかった。ぎりぎりの可だった。悪に対して善の気持ちで答えてくれたその教官との出会いは、私を大きく変えた。私は、四年間の学生生活を終え、学芸員の資格を得た。

それまでに、父に時どき女の影が見えた時があったが、私は知らんふりを通し、何事もないかのように過ごした。再婚に反対する気は毛頭なかったし、父には父の人生があると割り切っていた。母と会ったのはあの一回きりだった。二度と訪ねてくることはなかった。父は自分から母

のことを口に出すことはなかったし、わたしもあえて口にしなかった。私と父を捨てた母に会いたいという気持ちは起こらなかった。むしろ、立派になって見返してやりたいと思っていた。

愛子は、涙を浮かべながら最後まで聞いてくれた。そして私を抱きしめてくれた。心にぽっかりと穴の開いている傷跡を埋めるかのように、愛子のぬくもりは私を癒してくれた。二人は、お互いを語り、時には泣き、慰め合い、抱き合った。愛子は、私にとって砂漠の中のオアシスのようになくってはならない存在になっていた。やがて、私たちは結婚した。

四十二歳にして息子を授かった。太陽のように明るく育ててほしいと陽人はるとと名付けた。愛子は、ぱんぱんに張ったおっぱいをわが子に含ませている。その横顔は聖母のように愛に満ち溢れ美しかった。陽人を寝か

しつけながら歌う子守唄に私も子どものように聞き入り、陽人に注ぐ無償の愛に私も癒された。陽人の成長と共に、愛子への愛情はますます深くなつていった。

東京から愛子のお母さんと妹が駆けつけ、陽人を囲んで喜んだ。

「薫さん、ありがとう。愛子は父親を知らないから、薫さんのようなやさしい人と一緒になれて本当に良かった。しっかりしてるように見えるけど、本当は寂しがりやなのよ」

「お姉ちゃん、幸せそう。陽人ちゃんできて、やさしい顔になったね」

愛子の幸せそうな顔と可愛い陽人の誕生に、二人は喜びを表し、安心して東京に帰った。そして、平穏で、温かい家庭の中で、私も陽人と一緒に少しずつ成長していった。

朝夕肌寒さを感じられ、虫の泣き声やススキの穂に秋を感じる頃、や

さしい風とともに、愛子に東京の高校時代の友人から結婚式の招待状が届いた。陽人は一歳になり、よちよち歩きがようやくできるようになっていた。

「陽人がいるから、今回出席見合わせようかな」

愛子が遠慮がちに言ったので、

「どうして、行ったらいいよ。陽人はぼくが面倒見るから」

「でも、大変でしょう。仕事もあるし」

「いや、休暇もたまっているし、この際まとめて取ろうかな。愛子もずっと陽人と一緒に大変だっただろう。たまには息抜きでもしてきたらいいよ」

「本当！じゃあ、一泊二日で行こうかなあ」

弾けんばかりに、声が上がっている。

「もつとゆっくりしてきたらいいよ。友人とも久しぶりで会うんだし、積もる話もあるだろう。実家にも顔を出したらいいよ」

愛子は張り切って友人と連絡を取り合い、結局二泊三日で東京に行くことに決まった。初日は結婚式と披露宴に出席するためホテルで宿泊し、二日目は実家に泊まる事になった。いそいそと準備を整える愛子の表情は、生き生きとしていた。私は三日間の休暇を申請し、よちよち歩きを始めたばかりの陽人と、どう過ごそうかと考えていた。

陽人は、聞き分けのいいあまり手のかからない子だった。朝の柔らかい日差しの下、散歩がてら近くの公園に行く。芝生が敷きつめられ、転んでも危なくないので安心して過ごせる。私とつないだ手を離し、よたよた歩いたかと思うとすぐにどてんと転ぶ後ろ姿に、つい笑みがこぼれる。手を出しかけるが、気持ちを抑え一人で起き上がるまでそつと見守る。

遊び終えて家に帰り果汁を飲み終わると、ころっと寝てしまうのも可愛い。その間に片付けや昼食の準備をする。離乳食も愛子が小分けにした容器に作り置きしてくれたので、電子レンジで温めるだけでよかった。午後は家の中でおもちゃで遊んだり、本を読んだりして過ごす。側にいればご機嫌だし、ウーツとかアーツとか言葉にならない声を発し、よだれを垂らしながら笑う。三時にはおやつを食べ、一緒に昼寝をした。風呂に入れ終わるとほっとし、夜九時陽人が寝る頃には私も睡魔に襲われた。愛子からの電話で目を覚ましたが、大丈夫だよと携帯を切った。

翌日、陽人を連れホスピスに入院している父を見舞う事にした。四年前胃を摘出したにもかかわらず、そのつなぎめの食道部分にがんが再発したのだ。同時に写真館を畳んだ。すでに父は七十二歳になっていた。

「がんが胃と食道の接合部分、そして肝臓にも転移しています。手術も不

可能ですし、治療の方法もありません。あとは余命をどう過ごすかです。治療法がありませんから、退院していただかないといけません。できればホスピスに転院した方がいいと思いますよ」

「あどどのくらい持つんでしょうか」

「早くて三か月でしょう」

と主治医から告知されたときは動揺を隠しきれなかった。それでもホスピスを紹介してもらい、無事転院が決まったときは少し安心した。父への告知は主治医にお願いし、私も同席した。父は静かに受け止めた。

ホスピスに移ってからの父は、病院に入院していた時よりも元気になった。医師や看護師の対応が親切で何でも受け入れてくれるので上等だと居心地の良さに喜んでいた。ホスピスは、本人の趣味ややりたい事を全面的に応援するという方針で、積極的に患者と向き合ってくれる。

「写真以外、何も趣味はない」

と言う父に、看護師は奮起を促したが、一眼レフカメラを持参しているにもかかわらず、父はさわろうともしなかった。体がきついのか、だんだんとベッドで寝ている時間が多くなっていった。

陽人を抱っこして部屋に入ると、父は白いベッドの上で無表情な人形のように横たわっていた。私たちに気づくと、一瞬生気がさした顔は不似合いな笑顔に包まれて陽人に向けられた。

「陽人、大きくなったね」

まるで知らない人を警戒するかのよう陽人は泣き顔になる。

「陽人、おじいちゃんだよ」

私が抱っこした腕を変えて父に向けるが陽人はますますおびえて私にしがみつく。困った顔をして、父はそっと陽人の手に触れた。私は慰め

るように言った。

「今、人見知りが激しいんだよ」

「そうか、これも知恵が出ている証拠だな。もう歩けるのか？」

「うん、だいぶ」

陽人を挟んで不器用な会話しかできなかつたが、親子三代が揃つたな
んとも新鮮な空間だった。

「散歩でも行こうか」

私が誘うと、

「そうだな。三人で行くか」

父はゆっくりと起き上つた。散歩といつても、フロアーの廊下を一周し、
離れに設置されたやや広いラウンジで休憩するぐらいだが、歩行も緩慢
になつてきた父にはきつそうだった。死に向かう父と、これから成長し

ていく陽人。対比することは辛い、腰かけに深く座り、目を閉じる父には未来が限られており、よたよた歩きながらも、元気いっぱい陽人には未来に希望を感じさせる。不思議な気持ちで、二人を見ていた。

「部屋に戻ろう」

父の一言で、私たちはまたよろよろと廊下を歩いた。痩せて小さくなった父が、西日を受けて、まるで陽炎のように弱々しく映った。部屋のベッドに横たわると、

「ふーっ」

ためいきをついて目を閉じたが、突然思い出したように目を開け、私に言った。

「ロッカーの中に、一眼レフとアルバムが入っているから取ってくれないか」

見覚えのある、父のカメラ用バッグが目に入った。下には大きめのアルバムが置かれている。それらを取り出すと、ベッドの上に置いた。

「これは、父さんのお気に入りのお眼鏡だ。形見に薫に持っていてほしい。」

すり減ってきたびれた感のバッグごと差し出した。私はうなずいて受け取った。

「これで、陽人の写真をたくさん撮るよ」

「そうだな」

そして、まっすぐに言った。

「これは母さんの写真だ。適当に処分してくれ」

初めて見るアルバムだった。表紙をめくると、父と並んだ幸せそうな美しい母が写っていた。そして、私の百日記念写真。次のページをめく

ると、私を抱いた母と、父と三人の家族写真が出てきた。やさしい笑顔の母、ちよつと得意げな若い父、まん丸顔で純粹無垢な表情の幼い私。そこには、紛れもない家庭を営んだ家族の顔があつた。そして、両親に愛された幼い私がいた。母に愛された私はここにいたのだ。そう思うだけで胸がいつぱいになった。何も言わず、アルバムを閉じると、父を見た。父はやさしい笑顔を返してくれた。

「父さんはな、母さんが大好きだった。だから、母さんが駆け落ちをして、家を出ていってからも、もしかしたら帰ってくるかもしれないと思って、ずっと待っていたんだよ。今思えば、仕事仕事で忙しく、母さんに構つてあげなかつたのがいけなかつたのかもしれない。愛はずつと続くと思っていたんだ。母さんが出て行って初めて母さんの大切さに気づいたよ。」

一呼吸すると、

「薫、愛子さんを大切にしろよ。家族がいるってことは幸せな事だよ」

私はうなずいた。そして、

「父さん、写真館の壁に飾ってあったいちばん左端の女性の写真、もしかしたらあれ母さんだった？」

「ああ、そうだ」

「ぼく、その写真を見るたびに母さんかも知れないと思っていたんだよ」

「不思議だな」

父は、少し照れくさそうにわらった。

アルバムを大切に保管していた父の気持ちだが、痛いほどわかった。それは、父にも母にも捨てられたと思っていた自分の誤りに気づいた瞬間でもあった。

その夜、寝入った陽人の寝顔を見ながら、何気なく想像してみた。もし、

愛子がいなくなったら、私は陽人と二人で暮らしていけるだろうか。今までのように仕事は続けられるだろうか。その時、まるで潮が満ちてくるように父の気持ちひたひたと伝わってきた。妻に裏切られた絶望と惨めさの中で、どれほど苦悩したことだろう。不器用で愛情表現が下手なだけに、私との二人暮らしに戸惑ったに違いない。いや、そんな中であっても、私のために精いっぱい生きてきたに違いない。いつしかこれまでの二人を回想していた。

そういえば、唯一父と過ごした楽しい思い出がある。父は相変わらず忙しく、ほとんど私に構わなかったが、ある日曜日の事だった。

「今日は海に行くか」

そう言うと、私に準備をするよう言った。私はズボンの下に海水パンツを穿き、ゴムぞうりをつっかけた。

「帽子は持ったか、海は暑いぞ」

父に言われ、あわてて野球帽を被った。二人でバスに乗った。私は窓側に座り、父は通路側に並んで座った。

「名城ビーチに行こうな。ちよつと遠いけど」

そう言うと、やがて父は眠ってしまった。それでも、側に父が居てくれることが嬉しくて、私は窓から見える風景に心を躍らせながらも、何度も父を顧みた。

名城ビーチにはたくさんの方がいた。父は、丸い浮き袋を買ってくれた。私は、シャツとズボンを脱いで海水パンツだけになると、こわごわ海に入った。父はズボンを膝まで捲し上げ、麦わら帽子を被り、私の頭から浮き袋を通すと、ゆっくり引っぱってくれた。初めての海だったが、怖いと言うよりうれしい気持ちの方がいっぱいだった。降りそそぐ太陽の

光と、きらきら反射する水面の中で、父の白い顔が笑っていた。

やがて、病室の白いベッドの上に横たわる父が、蜘蛛に見えてきた。苦悩と孤独の中でもひっそりと存在感を表す、大きな蜘蛛だった。私と父をつなぐ細い糸はいつも頼りなかった。しかし、どんなに風に吹かれても、破られてもまた糸を紡いでは再生の網を張っていたのかもしれない。父は、いつも私を守っていてくれたのだ。

陽人が熟睡しているのを見届けると、私は書斎に入った。本棚の中から「考古学による日本の歴史」と書かれた背表紙の本を抜いた。中に挟まれているのは、色の褪せた一枚のはがきだった。

『あけましておめでとーございます。』

今年もよろしくおねがいます。

かおる、元気ですか。最近顔が見えないのでみんな気にしているよ。

たまには家に遊びに来てね。

高校受験、体につけてがんばってね。応援しているよ

昭和六十二年 元旦』

正月だというのに変わり映えのない家の中で、早朝、郵便受けを通して玄関に落ちていたはがきだった。官製はがきに赤い色鉛筆で年賀と記され、差出人金城洋子の字が大きく踊っていた。消印が無いのでおそろく直接郵便受けに投げ込んだのだろう。苦笑いしながらも、うれしかった。ちようど私は中学三年生で、高校受験を控え何かと気がめいるときに、気にかけてくれる人がいる事がとても胸に沁みた。洋子の『かおる、すごいねえ』という言葉にどれほど励まされたことだろう。

私が小学三年生になったばかりの頃だった。学校を終え、家で学校図書館から借りた本を読んでいた。玄関のドアをノックする音が響き、

「かおるー、かおるー」

と、洋子の叫ぶ声が聞こえ、あわてて玄関を開けた。幼稚園児になった洋子が、立っていた。

「哲にいちゃんどけんかしたから、いえでしたの。かおるのうちにとめて」
「えーっ、家出？」

洋子は、私の返事も待たず家の中に入った。

「哲にいちゃん、いじわるだからきらい。かおる、ようこのおにいちゃんになつて」

まんざらでもなく、私はうれしかった。何の疑いも持たず、幼なじみとして慕ってくれる洋子を追い返すこともできず、一緒に遊び、おやつを食べた。本を読んでいる私の側で、洋子はお絵かきをしている。こんな二人の時間が、ずっと続けばいいと思った。夕方になり薄暗くなっても、

洋子は帰ろうとしなかった。私の方が気になり、

「洋子、そろそろ家に帰らないとみんな心配するよ」

「かえらないよ、かおるといるもん」

「そんな事言っても・・・」

しばらくすると、哲がやってきた。

「洋子、やっぱりここにいたな。母ちゃんがはやくかえってこいって」

「いやだよ、哲にいちちゃんなんかだいつきらい。かおるのほうがすき！」

哲は怒って帰って行った。私は部屋の電気をつけ、台所の電気もつけた。

しばらくして、おばさんと哲が玄関に立った。

「洋子、いいかげんにしなさい。家に帰るのよ。薫ちゃんも、困っている

でしょ」

「いやだよ、ようこかおるといる！」

「何いってるのー！」

おばさんは、家に入り込んで洋子をひっぱった。洋子は私にすがりつき、

「いやだー、かおるといるー」

わあーんと泣き出してしまった。それでも大人の力は強く、あっさりと洋子は連れて行かれた。あとに残された私は、洋子を守りきれなかった非力さと寂しさで泣いてしまった。この事を機に、洋子は私にとって、特別な存在になってしまった。

小学校の運動場で、友達と走り回っている洋子を目で追っかけた。金城家の前を通り、中から聞こえる洋子の笑い声に耳をすませたこともあった。高校生の洋子が、同じ学校の男子生徒と家の前で楽しそうに話しているのを見た時、知らんふりをして通り過ぎしたが、寂しくて悲しかった。

たのを覚えている。色んなことが思い出された。

十年前、偶然に「親子史跡めぐり」で再会し、二児の母になり落ち着いてきれいになった洋子の顔を思い浮かべる。

「透兄ちゃんは結婚して子どもは三人いるけど、哲兄ちゃんはまだ独身だよ」

「おじさん、おばさんは元気？」

「うん、父ちゃんは定年した後、庭を畑にしているいろいろな野菜を作っている。母ちゃんは年とったけど相変わらずガミガミうるさいよ」

そして、私の名刺を見て叫んだ。

「薰すごいねえ、学芸員なんだ」

久しぶりに聞く洋子のすごいねという言葉に、照れ隠しに笑ったものの、甘酸っぱい懐かしさがこみ上げてきた。満面の笑みを浮かべて二人

の子どもの手を引き、バイバイと遠ざかっていく洋子の後姿を見えなくなるまで見送った。会えてよかった。

孤独な子ども時代だったが、金城家の存在がどんなに自分を支えてくれた事か、そして洋子からののがきは、私の宝物だった。

再び消印のないはがきに目を通すと、意を決して半分に破った。

(もう、今の私には必要ない)

それを重ね、さらに半分破った。また破った。

愛子が東京にいてすぐに会えないことが、いかに愛子を愛しているかを再確認できるきっかけになる。愛は当たり前前のように側にありながら、気づかないものなのかもしれない。

私は、机の中から買い置きしていた官製はがきを一枚取り出し、宛名に父の名を入れた。窓から外を見ると、大きな月が目に入った。とても

きれいな月だった。風があるのだろうか、流れる雲に見え隠れしている。まるで私を応援しているかのように思え、意を決して筆を走らせた。父に反抗することでしか、自分を立て直すことができなかつた私の反省を込めた。父はいつたいどういう風になたしを見ていたのだろうか。

『父さんへ』

私は陽人が生まれて、親の気持ちが分かるようになりました。

父さんに心を閉ざし、反抗ばかりしていた自分を反省しています。

今までのわがままを許してください。

今まで本当に有難うございました。

薫より
』

翌日、夕方六時に愛子の乗った飛行機は那覇空港に到着するので、陽

人と二人で迎えに行った。

「はると、はると」

と、呼んで駆けてくる愛子に、陽人は手足をばたつかせて喜びを表した。やはり母親にはかなわないと思った。しつかり陽人を抱きしめた愛子は、生き生きとした表情で、

「ただいま、三日間大丈夫だった？」

と私に声をかけた。

「別にどうってことないよ」

平然と答えたが、すぐに

「いやー、帰ってきてくれて良かった。正直疲れたよ」

笑い声があふれた。

その足で、三人で父を見舞った。愛子に抱っこされた陽人は機嫌がよく、

笑っておじいちゃんと握手した。

「お父さん、友人の結婚式に参加するため、東京に行ってきました。ついでに、実家にも寄りました。母も妹も元気でした。これはお土産です」

愛子は、リボンのかかった可愛い花柄の包みを取り出して、父に渡した。父は、うれしそうにリボンをはずした。

「きれいな花だね」

「プリザブドフラワーって言うんです。色持ちが良くて、枯れない花なんです。」

「そう、きれいだね、ありがとう」

父は、嬉しそうに微笑んだ。

「それから、母も妹もお父さんの具合を気にしていました。おいしいものでも食べて、元気を出して下さいって母から預かってきました」

そつと見舞金を置いた。しばらく愛子の実家の話で盛り上がったが、やがて

「父さん、散歩にでも行こうか」

私は誘ったが、父は首を振り

「今日はよしておく。どうも体がだるくてね」

つらそうに笑った。疲れているようなので、

「もう帰るね。休んだ方がいいよ。そういえば今日の昼、良子叔母さんから電話があったよ。明日の午後、お見舞いに行きたいけどと言っていた。父さん退屈しているはずだから、何時でも顔だしてと言つといたよ」

父はうれしそうに笑った。帰り際にそつと昨晚書いたはがきを手渡した。

秋も深まり、静寂な夜更けにこおろぎの声が聞こえるようになった。

父は食欲がなくなり、点滴を打つ日が多くなった。私は相変わらず仕事に忙しく、愛子は陽人の世話に明け暮れていた。

やがて、私に一通のはがきが届いた。

『薫へ』

父さんは、薫に親として何もしてあげられなかった。つらい思いばかりさせてしまい、本当にすまないと思っている。

それでも、薫は一人前に社会生活を送り、ちゃんと家族を養っている。立派な、自慢できる息子だ。今まで本当にありがとう

父より』

死期のせまった震える手で書いたのだらう。ミミズの這ったような字だった。涙で文字がかすんで見えた。

(了)